

日中数量類別詞の範疇化機能の対照研究

—日本語の「粒」を中心に

北京外国語大学 北京日本学研究中心 センター 李月明

要旨： 類別詞とは、一般的に「名詞の意味的分類を表す言語手段」とされる。言語類型論的に、日本語と中国語はともに類別詞を持つ「類別詞言語」であるが、それは類別詞を持たない言語、即ち「非類別詞言語」である印欧諸言語と異なる重要な特徴でもある。名詞の数量表現において、類別詞は名詞を個別化・集団化するもので、数量詞は数を表すものである。

従来、数量類別詞については、主としてモノの数や量を数える数量詞（例えば、日本語では「助数詞」、中国語では“量詞”）としての研究がなされてきたが、モノを範疇化する類別機能は疎かにされてきたといえる。一方、近年言語研究の視野が広まるにつれ、類別詞の類別機能が注目されつつあり、研究成果も徐々に出始めている。

本研究では、言語類型論の観点から、日中両言語の類別詞について比較・対照のもと考察を行う。辞書解釈（『数え方の辞典』）とコーパス調査（『中日対訳コーパス』、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)、『BCC コーパス』）に基づき、「丸くて小さいもの」を類別・範疇化する日本語の典型的類別詞「粒」と、それに対応する“粒/顆/滴/塊”などの中国語の類別詞を体系化し、範疇化における日中両言語の認知プロセスの異同、およびその原因についての分析も試みる。

考察を通じて以下のような結論が得られた。

1) 日本語では「丸くて小さいもの」を範疇化する際、主として類別詞「粒」を用いる。一方、対訳する中国語の分類類別詞は、「ゼロ次元・点」に近い立方体に注目する“粒”と“顆”、「三次元・立体性」に注目する“塊”、「機能性」に注目する“丸”、「個性性」に注目する“个”、「属性/個性性」に注目する“只”と「モノの量」に注目する計量類別詞の“滴/点”などがあって、日本語のそれと対比すると、かなり細分化されていることが分かる。

2) 「粒」の意味拡張プロセスは、「粒」のプロトタイプ的成員のイメージ・スキーマ「丸くて小さいもの」が、「類似性」の連想というメタファーに動機づけられ、「周辺の範疇」、「別の範疇」へと拡張していく過程と考えられる。